

神殿にアラレが蒔かれ  
鯉切りの儀式が終了



## 成田 歴史 玉手箱

●43回●

歴史と伝統文化の  
まち・成田。市内に  
は、歴史ある文化財  
が多数あります。

### 新妻の鯉切りオビシャ

## 古式にのっとった厳粛な神事



新妻地区の産土様「諏訪神社」

もうすぐお正月。1月から2月にかけて市内各地で行われる農村祭事・オビシャ。利根川沿岸地域や印旛地区はオビシャ行事が盛んに行われる地域で、いろいろな形のオビ

シャが残っています。中でも新妻地区のそれは、珍しい鯉切りオビシャで今も諏訪神社で奉納されています。

伝承によれば、源頼朝が奥州征伐の際に新妻地区に立ち寄り、つくも川(現在の根木名川)で捕れた鯉を献上して、武運長久・戦勝を祈願し大変喜ばれたといわれ、その後、五穀豊穡・区民の幸福を祈願するために行われるようになりました。

この神事、数年前までは毎年1月20日に行われていましたが、現在では20日以前の最も近い日曜日となりました。また、諏訪神社の拝殿が再建された昭和55年以前は、当堂(1年間御神体を守ってきた当番)家で行われていました。

神事は、神官によるお祓い・祝詞の奏上、神社総代・区長・当堂・米堂(これから1年間御神体を守る人)らによる玉串の奉納後、いよいよ鯉切りの儀式です。神前に生きた鯉が運び込まれ、出席した人たちによって「鯉の褒め問答」が行われます。「金色に輝く」「鱗がまばゆい、目

の下3尺に及ぶ大魚」「淡水魚の王者といわれる大魚」などと鯉を褒め、「このような大魚わたしごとき者には包丁を向けることはできません」「修行を積んだ料理の名人がいると伺っております」などと丁寧に譲る口上が一巡すると、この日の主役である鯉切り役を務める子どもの登場です。この大役を務める子は例年、当堂の家から選ばれます。袴を着て包丁と菜ばしを頭上高く振りかざし、円を描くようにして鯉を調理し神様に献納。最後に参加者が「豊年だ!」「万作だ!」と大きな声を連呼しながらアラレを蒔き鯉切りの儀式が終わります。そして、御神体の引継ぎとお神酒や神饌(お供え)を一同で食する直会の儀をもってオビシャ行事が終了します。

オビシャは時代とともに次第にその形式が薄れつつありますが、市内にはまだまだ地区独特の行事が人々の努力によって受け継がれています。鯉切りオビシャもこれからも伝え残したい大切な行事の一つです。



この日のために練習を積み重ね大役を果たした岩館健太君(平成16年1月18日)

### 編集後記

本号の表紙はハンマー投げ金メダリストの室伏選手。同選手が成田高校陸上部に在籍したのは平成2年からの3年間です。この間、高校記録を打ち立てるなどの活躍を見せましたが、意外にもハンマーを投げ始めたのは高校に入ってから

らとのこと。当時からその才能は並外れていましたが、ハンマー投げの第一人者、室伏重信さんの子息ということで注目を集めていました。わたしたちのまちが金メダルへの出発点だったと思うとうれしくなりません。